

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいさんしゅう
しゅくめいてんかん
第三章 宿命転換

いぞく かた
げきれい
遺族の方への激励

いぞく かた げきれい

遺族の方への激励

よ よ ひぞう ふか り しょう さんぜ しょぶつ

能く能く秘蔵して深くこの理を証し、三世の諸仏の

ごほんい あいかな にしよう にてん じゅうらせつ おうご こうむ

御本意に相叶い、二聖・二天・十羅刹の擁護を蒙り、

とどこお な じょうじょうぼん じゃつこう おうじょう と しゅゆ あいだ

滞り無く上上品の寂光の往生を遂げ、須臾の間に

くかいしょうじ ゆめ なか かえ きた み じつぼうほうかい こくど へん

九界生死の夢の中に還り来つて、身を十方法界の国土に遍

こころ いっさいうじょう しんちゅう い うち かんぼつ そと

し、心を一切有情の身中に入れて、内よりは勧発し外よ

いんどう ないげそうおう いんねんわごう じざいじんずう じひ

りは引導し、内外相応し、因縁和合して、自在神通の慈悲

ちから ほどこ ひろ しゅじょう りやく とどこお あ

の力を施し、広く衆生を利益すること滞り有るべか

らず。

(049

三世諸仏總勘文教相廃立

(總勘文抄)

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

そうかんもんしよう

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

728

ページー8行)

いま にちれんとう たぐ しようりよう とぶら とき ほけきよう どくじゆ

今、日蓮等の類い、聖霊を訪う時、法華經を讀誦し

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ とき だいもく ひかりむけん いた

南無妙法蓮華經と唱え奉る時、題目の光無間に至つて

そくしんじようぶつ えこう もん ことお

即身成仏せしむ。回向の文、これより事起こるなり。

(095 御義口伝 おんぎくでん

いぞく かた げきれい

遺族の方への激励 991ページー2行)

にちれん もんか だいごほんぞん けちえん な ひと

いま日蓮とその門下が、大御本尊に結縁して亡くなつた人を

ほけきよう どくじゆ なんみようほうれんげきよう とな ついぜんくよう

法華經を讀誦し、南無妙法蓮華經と唱えて追善供養するとき、

だいもく ひかり むげんじごく そくしんじようぶつ

題目の光が無間地獄にいたつて、即身成仏させることができるの

えこう もん お

です。廻向の文はここから起こっているのです。

しかりといえども、一人の悲母、堂に有り。朝には出で

しゆくん

もう

ゆう

い

したく

かえ

いとな

て主君に詣で、夕べには入って私宅に返り、営むところ

ひも

そん

こうしん

い

は悲母のため、存するところは孝心のみ。しかるに、去ぬ

つきげじゆん

ころ

しょうじ

ことわり

しめ

こうせん

みち

る月下旬の比、生死の理を示さんがために黄泉の道に

おもむ

きへん

なげ

い

よわい

くじゆん

およ

趣く。ここに貴辺と歎いて云わく、齡すでに九旬に及

こ

とど

おや

さ

しだい

び、子を留めて親の去ること次第たりといえども、つらつ

こと

こころ

あん

さ

のちきた

ら事の心を案ずるに、去つて後来るべからず。いずれの

つきひ

ふたはは

くに

な

いま

のち

たれ

はい

月日をか期せん。二母、国に無し。今より後、誰をか拝す

べき。

りべつしの

がた

しやり

くび

か

あし

まか

離別忍び難きのあいだ、舍利を頸に懸け、足に任せて

だいどう

い

かしゆう

こうしゆう

いた

ちゆうげん

おうふくせんり

大道に出で、下州より甲州に至る。その中間、往復千里

およ

くにぐにみなききん

さんや

とうぞくじゆうまん

しゆくしゆくろうまい

に及ぶ。国々皆飢饉し、山野に盜賊充滿し、宿々糧米

ぼうしよう

わ

みるいじやく

しよじゆうな

ぎゆうば

乏少なり。我が身羸弱にして所従亡きがごとく、牛馬

こうご

がが

たいざんじゆうじゆう

まんまん

たいがたた

合期せず。峨々たる大山重々として、漫々たる大河多々

こうざん

のぼ

こうべ

てん

さ

ゆうこく

くだ

あしくも

なり。高山に登れば頭を天に挿し、幽谷に下れば足雲を

ふ

とり

わた

がた

しか

こ

がた

踏む。鳥にあらざれば渡り難く、鹿にあらざれば越え難

めくるめ

あしひ

らじゆうさんぞう

そうれい

えん

うばそく

し。眼眩き、足冷ゆ。羅什三蔵の葱嶺、役の優婆塞の

おおみね

ただいま

うんぬん

大峰も只今なり云々。

のち しんとう たず い いちあんじち み ほつけどくじゆ
しかる後、深洞に尋ね入つて一菴室を見る。法華読誦の

こえせいてん ひび いちじようだんぎ ことばさんちゆう き あんない ふ
音青天に響き、一乗談義の言山中に聞こゆ。案内を触

しつ い きようしゆしやくそん ごほうぜん はは こつ あんち
れて室に入り、教主釈尊の御宝前に母の骨を安置し、

ごたい じ な がつしよう りようげん ひら そんよう はい
五体を地に投げ合掌して、両眼を開いて尊容を拝し、

かんきみ あま こころ くる や わ こうべ ふぼ
歡喜身に余り心の苦しみたちまち息む。我が頭は父母の

こうべ わ あし ふぼ あし わ じつし ふぼ じつし わ くち
頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口

ふぼ くち たと たね このみ み かげ
は父母の口なり。譬えば、種子と菓子と、身と影とのごと

きようしゆしやくそん じようどう じようぼん まや とくどう きつせんしし
し。教主釈尊の成道は浄飯・摩耶の得道、吉占師子・

しようだいによ もつけんそんじや どうじ じようぶつ かん
青提女・目犍尊者は同時の成仏なり。かくのごとく観ず

るとき 無始の業障たちまちに消え、心性の妙蓮たちま
ちひらに開き給うか。たも

135 忘持経事 ぼうじきょうじ

遺族の方への激励 いぞくかたげきれい
1319 ページ 4 行

ほうれんほつし まいあさくち こんじき もんじ い あらわ

法蓮法師は毎朝口より金色の文字を出だし現す。この

もんじ ごひやくじゅうじ いちいち もんじへん にちりん

文字の数は五百十字なり。一々の文字變じて日輪となり、

にちりんへん しゃかによらい だいこうみよう はな だいち 突

日輪變じて釈迦如来となり、大光明を放つて大地をつき

通 さんあくどう むけんだいじよう て ないしとうざいなんぼく

とおし、三悪道・無間大城を照らし、乃至東西南北、

じようほう む ひそうひひそう 上 ところ

上方に向かつては非想非非想へものぼり、いかなる処に

か こしじようじよう ところ たず い たま か

も過去聖靈のおわすらん処まで尋ね行き給いて、彼の

じようじよう かた たも われ たれ おぼ われ

聖靈に語り給うらん。「我をば誰とか思しめす。我はこ

なんじ しそく ほうれん まいあさじゆ ほけきよう じがげ

れ汝が子息・法蓮が毎朝誦するところの法華經の自我偈

もんじ もんじ なんじ まなこ みみ

の文字なり。この文字は、汝が眼とならん、耳となら

ん、足あしとならん、手てとならん」ところそ、ねんごろに語かたらせ

たも 給たまうらめ。その時とき、過去聖靈かこしよりようは、わ「我が子息・法蓮は、しそく ほうれん

こ 子にはあらず、善知識ぜんちしきなり」とて、娑婆世界しやばせかいに向かつて む

子こにはあらず、善知識ぜんちしきなり」とて、娑婆世界しやばせかいに向かつて

拝 おがませ給たまうらん。これこそ実の孝養まこと こうようにては候そうろうなれ。

おがませ給たまうらん。これこそ実の孝養まこと こうようにては候そうろうなれ。

ほうれんしょう

164 法蓮抄

いぞく かた げきれい

遺族の方への激励

1426

ページー13行

しじようきんごどの

はは

はは

どうしん

こうべ

摩

「これこそ四条金吾殿の母よ母よ」と、同心に頭をな

よろこ

褒

たも

こ

われ

で、悦びほめ給うらめ。「あわれ、いみじき子を我はもち

しやかぶつ

語

たも

たり」と釈迦仏とかたらせ給うらん。

しじようきんごどのごしよ

(191 四条金吾殿御書

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

1515

ページー2行)

あん

しょうりよう

くどく

だいげつりん

これをもつて案ずるに、聖霊はこの功德あり。大月輪の

なか

だいにちりん

なか

てんきよう

さいし

み

う

中か、大日輪の中か、天鏡をもつて妻子の身を浮かべて

じゆうにとき

ご 覧

さいし

ぼんぷ

十二時に御らんあるらん。たとい、妻子は凡夫なれば、こ

見 聞

たと

みみ 癢

もの

いかずち

こえ

聞

れをみずきかず。譬えば、耳しいたる者の雷の声をきか

め 潰

もの

にちりん

み

おんうたが

ず、目つぶれたる者の日輪を見ざるがごとし。御疑いあ

さだ

おん 守

たも

うえ

るべからず。定めて御まぼりとならせ給うらん。その上、

おん 渡

さこそ御わたりあるらめ。

みよういちあまごぜんごしようにそく

ふゆ

かなら

はる

こと

(244 妙一尼御前御消息 (冬は必ず春となるの事)

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励 1696 ページ 7 行)

こあぶつぼう　しょうりよう　いま

御座

されば、故阿仏房の聖霊は今いずくんにかおわすらんと

ひと　うたが　ほけきよう　みようきよう

かげ　浮

人は疑うとも、法華経の明鏡をもつてその影をうかべ

そうら　りようじゆせん　やま　なか　たほうぶつ　ほうとう　うち

て候えば、霊鷲山の山の中に、多宝仏の宝塔の内に、

ひがし向　にちれん　み　そうろう

東むきにおわすと日蓮は見まいらせて候。

せんにちあまごへんじ

(268 千日尼御返事

いぞく　かた　げきれい

遺族の方への激励　ページー2行)

1750

きへん こじろうにゆうどうどの みこ

しかるに、貴辺は故次郎入道殿の御子にておわするな

ごぜん

嫁

こころ

賢

ひと

り。御前はまたよめなり。いみじく心かしこかりし人の

こ 嫁

こにゆうどうどの

跡

継

子とよめとおわすればや、故入道殿のあとをつぎ、

こくしゅ おんもち

ほけきよう

おんもち

ほけきよう

国主も御用いなき法華経を御用いあるのみならず、法華経

ぎようじゃ

養

たま

年

々

せんり

みち

送

の行者をやしなわせ給いて、としどしに千里の道をおく

迎

い

おさなご

娘

ごぜん

じゅうさんねん

じようろく

りむかえ、去ぬる幼子のむすめ御前の十三年に丈六の

卒塔婆

立

おもて

なんみようほうれんげきよう

しちじ

あらわ

そとばをたてて、その面に南無妙法蓮華経の七字を顕し

ほくふうふ

なんかい

鱗

かぜ

当

ておわしませば、北風吹けば南海のいろくずその風にあた

たいかい

く

離

とうふう

せいざん

ちようろく

かぜ

りて大海の苦をはなれ、東風きたれば西山の鳥鹿その風

を身みにふれて畜生道をまぬかれて都率ちくしょうどうの内院ちくしに生まれ

卒塔婆そとつ ずいきないいん てう まなこ

ん。いわんや、かのそとばに随喜をなし、手をふれ眼に

みそうろうにんるい かこ ふぼ か くどく

見まいらせ候 人類をや。過去の父母も彼のそとばの功德

てん にちがつ じょうど 照 こうよう ひと

によりて天の日月のごとく浄土をてらし、孝養の人ならび

さいし げんぜ いのち ひやくにじゅうねんたも ごしょう ふぼ

に妻子は、現世には寿を百二十年持つて、後生には父母

りようぜんじようど 詣 たま みず澄 つき 映

とともに靈山浄土にまいり給わんこと、水すめば月うつ

鼓 打 響 思

り、つづみをうてばひびきのあるがごとしとおぼしめし

そらら とううんぬん のちのち ほけきよう

候え等云々。これより後々の御そとばにも、法華經の

だいもく あらわ たま

題目を顕し給え。

（
273

中興入道消息

なかおきのにゆうどうししょうそく

いぞく

かた

遺族の方への激励

げきれい

1771

ページー3行

われ しゅじょうし とき とうば た かいがんくよう
我ら衆生死する時、塔婆を立てて開眼供養するは、死の

じょうぶつ

そうもくじょうぶつ

成仏にして草木成仏なり。

そうもくじょうぶつくけつ

(277 草木成仏口決

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

1778

ページー1行)

生

とき

しょう

ほとけ

いま

し

ほとけ

しょうじ

いきておわしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに

ほとけ

そくしんじようぶつ

もう

だいじ

ほうもん

仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり。

うえのどののごけあまごへんじ

297 上野殿後家尼御返事

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

1832

ページー15行

うえのどの

い

ほけきよう

みちび

せい

（上野殿は）生きておられるときはあなたを法華経に導いた「生

ほとけ

な

いま

し

ほとけ

せいし

ほとけ

の仏」で、亡くなった今は「死の仏」であり、生死ともに仏なの

そくしんじようぶつ

だいじ

ほうもん

です。これが即身成仏という大事な法門なのです。

いかにも、いかにも、追善供養を心のおよぶほどはげみ
給うべし。たも

297 上野殿後家尼御返事

遺族の方への激励
いぞく かた げきれい
1835 ページ 9 行

このほどよみ候御経の一分、ことのへ回向しまいらせ

そうろう

候。

ひと

こ

持

あわれ、人はよき子はもつべかりけるものかなと、

涙

なみだかきあえずこそ候え。

そうら

みようしようごんのう

ふたりのこ

導

妙莊嚴王は二子にみちび

おう

あくにん

故

上

野

殿

ぜんにん

彼

かる。かの王は悪人なり。こうえのどのは善人なり。かれ

似

にはにるべくもなし。

うえのどのごへんじ

こうえのどのついぜん

こと

(298 上野殿御返事 (故上野殿追善の事))

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

1836

ページー15行)

その上、うえ との 幼 殿はおさなくおわしき。こしんぷ 故親父は、もののふ 武士なりしか

ども、強 あながちに法華經を尊び給いしかば、ほけきよう たつと たま りんじゅうしようねん 臨終正念

なりけるよしうけたまわりき。由 承

その親の跡をつがせ給いて、おや あと 繼 たま またこの經を御信用あれ

ば、こしようりよう くさ 陰 故聖靈いかに草のかげにても喜びおぼすらん。よろこ 思

生 あわれ、いきておわせば、いかにうれしかるべき。この

經を持つ人々は、きよう たも ひとびと たにん おな りようぜん 詣 合 他人なれども同じ靈山へまいりあわせ

給うなり。たも いかにいわんや、こしようりよう との おな 故聖靈も殿も、同じく

法華經を信じさせ給えば、ほけきよう しん たま おな う たも 同じところに生まれさせ給うべ

し。

うえのどのごへんじ つちもちくよう こと
299 上野殿御返事（土餅供養の事）

いぞく かた げきれい
遺族の方への激励 1838 ページ 11 行

ときみつ

ようしよう

とう

な

そのうえあなた（時光）が幼少のときあなたのお父さんは亡くな

とう

ぶし

つよ

ほけきよう

ごほんぞん

しん

られました。お父さんは武士でしたが強く法華経（御本尊）を信じら

りんじゆうしようねん

うけたまわ

おや

れたので、臨終正念であつたことを承 っています。その親の

あと

きよう

しんこう

跡をつがれて、あなたもまたこの経を信仰されているのですから、

な

とう

よろこ

い

亡きお父さんもどれほどか喜んでいることでしょう。もしも生きて

おも

いらつしやったならばどんなにうれしく思われたことでしょうか。こ

ほけきよう

じゆじ

ひと

たにん

おな

りようぜんじようど

の法華經を受持する人びとは、他人であつても同じ靈山淨土でい

な

とう

おな

つしよになることができます。まして亡きお父さんもあなたも同

ほけきよう

しん

おな

ところ

う

じように法華經を信じているのですから、かならず同じ所に生まれ

ちが

ていくに違いありません。

みそうら

悲

そうら

そうら

見候わざらんことこそかなしくは候え。さは候えど

しゃかぶつ

ほけきよう

み

い

そうら

りんじゆう

も、釈迦仏・法華経に身を入れて候いしかば、臨終めで

そうら

こころ

ちちぎみ

いっしよ

りようぜんじようど

まい

たく候いけり。心は父君と一所に霊山浄土に参りて、

て

取

こうべ

あ

よろこ

そうろう

手を取り頭を合せてこそ悦ばれ候らめ。

うえのどのごしよ

しちろうごろうしきよ

こと

332 上野殿御書（七郎五郎死去の事）

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

1904

ページー1行

こしちろうごろうどの

とうせい

にほんこく

ひとびと

似

たま

故七郎五郎殿は、当世の日本国の人々にはにさせ給わず、

幼

こころ

かしこ

ちち

あと

追

おんとし

おさなき心なれども、賢き父の跡をおい、御年いまだ

二十

およ

ひと

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

はたちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて

ほとけ

成

たま

ひと

じようぶつ

仏にならせ給いぬ。「一りとして成仏せざることなけ

こ

ねが

ひも

わ

こ

こい

おぼ

ん」はこれなり。乞い願わくは、悲母、我が子を恋しく思

たま

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

こ

しめし給いなば、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて、故

なんじようどの

こころうどの

いつしよ

う

ねが

たま

南条殿・故五郎殿と一所に生まれんと願わせ給え。一つ

種は一つ種、別の種は別の種、同じ妙法蓮華經の種を心

孕

たま

おな

みようほうれんげきよう

くに

う

にはらませ給いなば、同じ妙法蓮華經の国へ生まれさせ

たも

給うべし。

334 上野殿母御前御返事（四十九日菩提の事）

うえのどののははごぜんごへんじ

しじゅうくにちぼだい

こと

いぞく

かた

げきらい

遺族の方への激励

1908 ページ1行

こころうどの 年 じゅうろくさい こころ 根 見 目 形 ひと 勝

故五郎殿は、とし十六歳。心ね、みめかたち、人にすぐ

そうら うえ おとこ 能 具 ばんにん 褒

れて候いし上、男のうそなわりて、万人にほめられ

そうら 親 こころ したが みず

候いしのみならず、おやの心に随うこと、水の

器 物 随 影 み

うつわものにしたが、い、かげの身にしたがうがごとし。

家 柱 頼 みち 杖 思

いえにてははしらとたのみ、道にてはつえとおもいき。

箱 財 こ 使 しよじゅう

はこのたからもこの子のため、つかう所従もこれがた

われ死 担 野 辺 行 後

め、「我しなば、になわれてのぼへゆきなん。のちの

跡 思 置 深 思

あと、おもいおくことなし」とふかくおぼしめしたりし

先 立

に、いやなくさきにたちぬれば、「いかにや、いかに

や。ゆめかまぼろしか。さめなん、さめなん」とおもえど

醒

年

返

待

もさめずして、としもまたかえりぬ。いつとまつべしとも

覚

行

合

所

もう

置

おぼえず。ゆきあうべきところだにも申しおきたらば、

羽

てん

上

船

唐

土

はねなくとも天へものぼりなん、ふねなくとももろこしへ

渡

だいち

底

聞

ち

もわたりなん。大地のそこにありときかば、いかでか地を

掘

思

もほらざるべきとおぼしめすらん。

易

々

会

たも

そうろう

しやかぶつ

おんつか

やすやすとあわせ給うべきこと候。釈迦仏を御使いと

霊

山

じょうど

詣

合

たま

ほう

き

して、りようぜん浄土へまいりあわせ給え。「もし法を聞

ひと

じょうぶつ

もう

くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」と申

だいち 差

外

にちがつ

ち

お

たも

して、大地はささばはずるとも、日月は地に堕ち給うと

潮

満

干

よ

はな

夏

生

も、しおはみちひぬ世はありとも、花はなつにならずと

なんみようほうれんげきよう

もう

によにん

思

こ

会

も、南無妙法蓮華經と申す女人の、おもう子にあわずとい

説

そうろう

急

勤

うことはなしととかれて候ぞ。いそぎいそぎつとめさせ

たま

たま

給え、つとめさせ給え。

338 上野尼御前御返事（靈山再会の事）

うえののあまごぜんごへんじ

りようぜんさいかい

こと

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

1921

ページー1行

そうら

暗

やみ

つき

い

もしやのこと候わば、くらき闇に月の出ずるがごとく、

みようほうれんげきよう

ごじ

つき

あらわ

たも

つき

なか

妙法蓮華經の五字、月と露れさせ給うべし。その月の中

しやかぶつ

じつぼう

しよぶつ

ないしさき

た

たま

ごしそく

には、釈迦仏・十方の諸仏、乃至前に立たせ給いし御子息

あらわ

たも

おぼ

の露れさせ給うべしと思しめせ。

じようぞうじようげんごししようそく

(383 浄蔵浄眼御消息

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

2009

ページー8行)

こししょうりよう

さいごりんじゆう

なんみようほうれんげきよう

唱

たま

故聖靈、最後臨終に南無妙法蓮華經となえさせ給い

いっしょうないしむし

あくごうへん

ほとけ

たね

たも

しかば、一生乃至無始の悪業変じて仏の種となり給う。

ぼんのうそくぼだい

しょうじそくねはん

そくしんじようぶつ

もう

ほうもん

煩惱即菩提・生死即涅槃・即身成仏と申す法門なり。か

ひと

えん

ふさい

たま

によにんじようぶつ

うたが

かる人の縁の夫妻にならせ給えば、また女人成仏も疑い

なかるべし。

408

妙法尼御前御返事

(臨終一大事の事)

みようほうあまごぜんごへんじ

りんじゆういちだいじ

こと

いぞく

かた

げきれい

遺族の方への激励

2103

ページー5行)